

クラシック巡礼 6

# シューマンの恋

サイト掲載: [www.i-s-m-kk.co.jp/](http://www.i-s-m-kk.co.jp/)

2019年 4月20日

別当 勉

<betobetoven@mail2.accsnet.ne.jp>

## プロローグ

### シューマンの恋

ロベルト・シューマン (1810-1856) は、人に恋して止まない音楽家であった。とくに同業の音楽家にたいしては、こよなくなつて、同時代の名作曲家たちを友達にしてしまった。

#### ロベルト・シューマン



[harucla.cocolog-nifty.com/blog/2009/09/op17-5afd.html](http://harucla.cocolog-nifty.com/blog/2009/09/op17-5afd.html)

このことが、彼をして特徴が目立たない人にしてしまったのであろうか。すくなくとも私のこれまでのクラシック巡礼の旅においては疎遠であったが、それ故に私をむきにさせてきた。マウリツィオ・ポリーニの名演奏「交響的練習曲；作品13」に遭遇したことで、またとない好奇心に誘われ、35歳頃に百回以上も聴きこんだ次第である。これでシューマンを捉えたものと思ひ込んだのだから、素人の浅はかさにあきれる。だから、こうしてクラシック巡礼を書き始めてから、とんでもないロベルトの浪漫性に引き込まれてしまった。

彼がいなければ、バッハも、ベートーヴェンも、シューベルトも、当時、それほど有名にならなかった。彼らはロベルトの存在ゆえに再認識されて楽壇の神棚に飾られたと言っても過言ではない。

また、ロベルトは、女性に対しても志望が篤<sup>あつ</sup>かった。永遠の乙女を求め尽くした。その結果、9歳年下の類い稀な美少女クララ・ヴィーク (1819-1896) に惚れ込んだのである。彼女は敢<sup>すす</sup>んで、ロベルトの恋人となり、同志となり、かつ専属ピアニストとなった。クララと結婚してもそれらの関係は死ぬまで続いた。決して、ロベルトはいわゆる妻という限定した扱いをしなかった。現代に近いから、19世紀にあつては極端に先進的な恋愛思想を持っていたのである。

クララはロベルトとの結婚において、二人そろって、彼女の頑迷固陋<sup>がんめいころう</sup>な父と法廷闘争してもロベルトの熱愛に殉じた。彼女は、幼少よりピアノ演奏に才能をあらたかにして、その天与のピアノ演奏技術は全部、ロベルトに捧げられた。

#### クララ・ヴィーク



<https://ameblo.jp/f-chopin1810/entry-10613344993.html>

しかも、演奏活動では、あたかもギリシャ神話のエウロペ姫の如くヨーロッパの都市を駆け巡り、ロベルトたちロマン派のピアノ曲の普及に尽くした。ロベルトが46歳で逝去後も遺された8人の子供たちの生活費・養育費を稼ぐためにも、阿修羅のごとく巡<sup>めぐ</sup>ったコンサート・ツアーの業績は計り知れない。けっこうな額のロベルトの遺産には、決して手をつけなかった。

[註] エウロペ姫は[ヨーロッパの語源] ギリシャ神話の女性。テュロス王の娘。白い牡牛に姿をかえたゼウスの背に乗ったまま、ヨーロッパ大陸を飛び巡り、海を渡ってクレタ島に上陸し、ミノス・ラダマンテウス・サルペドンを生む。のち、クレタ王妃。牛は牡牛座となった。  
また、ガリレオが木星の衛星を発見した時、4つの衛星それぞれにゼウスの側女4人をあてて、2番目がエウロペ衛星と名付けられた。

### 若き日のブラームス



[https://blogs.yahoo.co.jp/mitosya/GALLERY/show\\_image.html?id=36231140&no=0](https://blogs.yahoo.co.jp/mitosya/GALLERY/show_image.html?id=36231140&no=0)

そして、何と言っても、クララより14歳も若い、晩年のロベルトに弟子入りしたブラームス（1833-1897）青年を、ロベルト亡き後も、彼女は助言して励まし続けたことは、筆舌に尽くし難い。かつ、彼のいたいけな慕情を受け止めつつも毅然として演奏活動に邁進し、その真摯な音楽家の求道<sup>くどう</sup>の姿を示すことによって19世紀楽壇きっての作曲家にしてしまったことは、絶対に音楽史においては忘却できない。

私たちは3Bというが、鉛筆の芯の濃さではない。バッハ、ベートーヴェン、ブラームスを束ねたクラシック三大作曲家の代名詞である。その一角をクララが音楽の女神：ミューズの化身の如く助成したのだから、何と言うべきか。歴史は女がつくると誰かが言ったようだが、クラシック音楽では、まさにクララが巨人ブラームスを仕立て上げたと言っても差し支えないだろう。

本当にそうなのかい、という疑問が湧いてくるのは当然である。これからロベルト&クララの行跡を、私がお遍路さまとして迎<sup>たど</sup>ってみよう。

## シューマニアーナ

この言葉は、シューマンの友人達を指すことで使うが、実際に余り流行ってはいない。

その第一の人は、メンデルスゾーンであり、ショパンとなるが、やはり、前者がライプツィヒにて相互に信頼して支援し合った昵懇の親友とも言えよう。特に、長い間眠っていたシューベルトの交響曲第9番「ザ・グレート」の発掘と初演こそ、二人の関係の親密さが明るみになった出来事とその証左でもある。

同い年のショパンは、はるか遠くのパリで活躍していて、2回しか会っていないが、ロベルトは絶えず注視していた。静かな競争心を燃やしたライバルだったのかもしれない。

そして、一つ年下のリストである。この人は、どちらかというと言いつつ、どちらかというと言いつつ、僕らは友達だというような顔をして、しゃあしゃあと振る舞った。つまり、リストの方が欧州中の著名音楽家を <sup>ことごと</sup> 悉く訪ねて友達にしてしまう、業界随一の図々しい社交家だったのではないか。しかも、リストが近づいた音楽家はすべて超一流になったことには、彼の鑑識眼の鋭さに驚くばかりである。

リストの娘が嫁いだワーグナーは、ロベルトの音楽を賞味して「シューマンの曲には旋律が聴こえない」という辛い批評をして、ロベルトを傷つけた。でも、シューマニアとしてロベルトの作品を鑑賞し続けた。ただし、この巨大な異端児：ワーグナーは、ベートーヴェンに惚れぬいたことで有名だが、ロベルトにも同じような性向が強かったから、二人はそこを共通認識して、お互いに認め合ったに違いない。

これら4人のクラシック楽壇における傑人たちが、ロベルトの友達だったことは、ロベルトの視野の広さに圧倒されるが、これは偏に「音楽新報」という業界雑誌を編集・発行して来たことも、大きく物を言っていた。

それら以上に、青年ブラームスが北ドイツからはるばる訪ねてきて弟子入りしたことこそ、ロベルトの歴史的功績としては最大であろう。もちろん、クララの存在と貢献も見逃せないけれども。

シューマンの活動地域



<http://seiko-phil.org/tag/シューマン/>

## ツヴィッカウ

ロベルト・アレキサンダー・シューマンは、1810年、ドイツ中西部のツヴィッカウで生まれて、育成された。第3回クラシック巡礼で述べたようにショパンと同年であった。当時は、ベルリンを拠点とするプロイセン王国に属していた。今のドイツの版図として統一されるのは、鉄血宰相ビスマルク（1815-1898）の登場まで待たなければならない。

このツヴィッカウは、昔から公園のような美しい町であり、中央広場に聖マリア大聖堂<sup>そび</sup>が聳え、同じ広場に面してシューマン博物館がある。父アウグストと母ヨハンナの第6子の末子で生まれた。父は書店および書籍商を営み、数千冊の蔵書を誇っていたから、私設図書館のようだったという。かつ、今でもドイツでは「文庫本の祖」と言われているほど、著述も行っていったから、こういった環境でロベルトの才能が文学にも芽吹き始めた。

しかしながら、ロベルト少年は、あるとき、豊かな家庭での夕食後のピアノ演奏に眼が輝いたそうである。聖マリア教会のオルガン奏者ヨハン・クンチュにピアノ演奏を教わることになった。また、8歳のとき、「第1回クラシック巡礼：ベートーヴェン」で述べた保養地カールスバートにて、当時のトップクラスのヴィルティオーゾとして著名な音楽家モシュレス（1794-1870）に遭遇して、幸運にも、あとで彼のソナタを献呈されたというから、この童子の才能が楽才モシュレスに瞩目されるほどであった。やがては、モシュレスはショパンとの交流も頻繁になったから、ロベルトとショパンの間の情報の行き交いでも役割を果たすことになる。また、少年期に既に、ギリシャ語、ラテン語（古代ローマ帝国の公用語）およびフランス語を習得していたというから、凄まじい学習意欲と能力を備えていた。

### ツヴィッカウの位置



ギムナジウム（Gymnasium）は、ドイツおよびその近隣諸国の、伝統的な7年制または9年制（10～19歳）の大学進学を前提とした中等教育機関であり、ツヴィッカウにてロベルトは入

学して、18歳（1828年）まで基礎教育を受けた。とくに、ピアノ演奏では、めきめきと腕を上げて、師匠のクンチュを追い越して独学に奔った。かつ、学生オーケストラの指揮者としても活躍し始めた。詩への憧憬もふくらみ、「詩芸術と音芸術」の融合に目覚め、17歳の時には「ポエジーと音芸術の内的な親近性について」という小論文をしたため、学内で講演もしたというから、やがてのリート作品にむすびついていくのである。

そして、ドイツの小説家：ジャン・パウル（1763-1825）の「生意気盛り」や「巨人」に夢中になったという。これも、評論家という文筆活動の下地となった。

結論的には、ロベルトは万能学生であったと言える。

## ライプツィヒ

1828年（18歳）、ライプツィヒ大学法学科に進み、故郷ツヴィッカウから離れてライプツィヒに移り住んだ。

文学にもあこがれながら、いつのまにかピアノに魅かれ、その演奏技術と音楽理論の習得のため、フリードリッヒ・ヴィークにピアノを習い始めた。初めは、シューベルトのピアノ曲に熱中したが、ゲヴァントハウスでベートーヴェンの交響曲チクルスを聴いてから、強烈な印象を受けて、作曲にも興味をそそられた。

[註] チクルス(独 Zyklus)とは、連続演奏。ある作曲家の作品を何回かの音楽会で連続して演奏するなど、特定の目的・意図をもって行う連続音楽会。

19歳になると友人からの話を聞いて、ハイデルベルグ大学のティボー教授に魅かれ、短期的に移籍することにした。ドイツでは転校が容易だったと言われている。この教授主催の「音楽の夕べ」には毎度のように参加し、ほとんど音楽に埋没することになってしまった。作曲に熱を上げ、数々の習作とスケッチを踏みながら、ようやく20歳（1830年）になって次の瑞々しい作品が生まれた。

### アベッグ変奏曲 へ長調 作品1(1831年出版)

<https://www.youtube.com/watch?v=VRgA00Cbifg>

これは、ショパンの「ドン・ジョヴァンニの主題による変奏曲」に触発されたと言われる。実は、マンハイムの高官令嬢メタ・アベックに魅了されてヒントを得たという。彼女を架空の女性アベッグにして、その綴り：ABEGGをイロホトトという音に替えてそのまま主題旋律にしたものである。古くは、バッハ：BACHが自分の名字を良く使っていた。

21歳になると、ロベルトはライプツィヒに戻り、ヴィーク家に下宿して、引き続きヴィークの指導を受けることになった。1日7時間もピアノ練習に励み、併せて聖トーマス教会のカントールであるヴァインリッヒに音楽理論を学んだ。ところが、フリードリッヒ・ヴィークは12歳になった娘クララ、この美少女の際立つ演奏技術に瞠目して、彼女のピアノ・レッスンに執心した。さらに、彼女の売込みに必死になった。ヨーロッパの各都市における演奏活動に熱を上げて、度々、彼女を連れて旅行に出かけていたから、ロベルトは蚊帳の外におかれる始末だった。

そして、文学を愛するあまり、ロベルトは自然に彼自身のペンネームを空想して、

### フロrestan と オイゼビウス

という仮想的な友人二人を、人間性を分けて作り上げるようになっていった。フロrestanは、積極的・活動的なロベルトの特徴を表し、オイゼビウスは消極的・瞑想的な性格を表現している。オイゼビウスのピアノ演奏は、フロrestanに比べるとメカニズムも完全に優秀

である。決断は遅いが、学識がある。ラロ先生は、フリードリッヒ・ヴィークをモデルにしたものだが、二人を調停する役割が与えられている。かつ、ロベルトが絶えずフロレスタンとオイゼビウスの二重人格の間を揺れ動いている自分の性情を一人の人格にまとめ上げようとしている理想像なのであった。

これが、次第に精神分裂的な病<sup>やまい</sup>に発展していったのではないかと、私は想像している。

最初は、ショパンの「ドン・ジョヴァンニの主題による変奏曲」をクララのピアノ独奏で聴き、管弦楽版の楽譜を取り寄せて一読した結果、

『天才だ！ 諸君、帽子をとりたまえ』

と地元の総合音楽新報にて論評したことは、余りにも有名すぎる。ちなみに、使った名はオイゼビウスだった。

ロベルトは、クララに挑むように、過度なピアノ練習に熱中した。より高度なピアノ演奏のために、手指の柔軟性と強靭さを鍛えることにした。師のヴィークから禁じられていたのに、当時、<sup>ちまた</sup>巷で推奨されていた指のストレッチ器具を使い過ぎて右手薬指に炎症を生じさせてしまった。人差し指も含めほとんど打鍵運動に支障となるほど損傷したという。一流のピアニスト・音楽家になるためには、致命的な禍根

を残すことになったのだが。人前で高度かつ過激な演奏を避ければ問題はなかったらしい。つまり、作曲のために演奏することまでは影響がなかったようである。

この事件は、「ときに<sup>わざわい</sup>禍は人生の岐路ともなる。」という諺どおりになるろうか。結局、彼の指向は作曲に向いて、クララの技巧が必需になっていくのである。

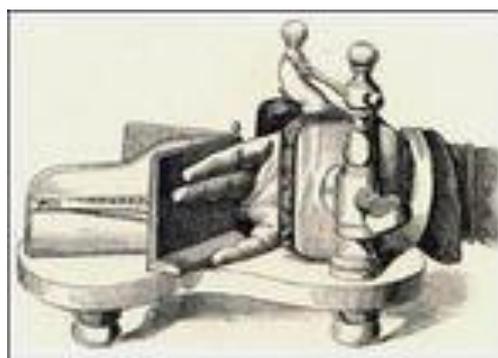
21歳のときに、師匠がほとんど留守のヴィーク家から、ロベルトは住まいを移した。そして、次の第二の創作が結実した。

### ピアノ小品集「パピヨン」（12の舞曲）作品2

<https://www.youtube.com/watch?v=-KxWtgm0NUs>

パピヨン (papillon) とは、フランス語であり、蝶々を意味するが、好きなジャン・パウルの著作に影響され、さなぎから変容する若い生を象徴しているらしい。私は、この初々しい作品の懐かしさに驚いた。いつかどこかで聴いたことがあるのだ。さらに、ロベルトの曲

#### 例. 指のストレッチャー



<https://www.increasehandspan.com/historical-attempts>

想の根幹、すなわち“**夢想的な調べ**”であるが、これに触れた想いに喜悅している。彼の意図した彼らしいロマン派音楽の真髓が芽吹き始めて、如実に覗かれる。

## ダヴィッド同盟

ロベルトが想定した音楽愛好者の集いを言うが、旧約聖書における古代イスラエルの若きダビデ王を象徴している。

[註] ダビデは、古代イスラエルの王。ダヴィデ、ダヴィドとも。羊飼いかから身をおこして初代イスラエル王サウルに仕え、サウルがフェリシテ人と戦って戦死したのちにユダで王位に着くと、フェリシテ人を撃破し要害の地エルサレムに都を置いて全イスラエルの王となり、40年間、王として君臨した。

1833年(23歳)、カフェ・バウム(1692年開店)で好きなビールを傾けながら同盟を構想したと言われる。それは、当時の音楽会では、空虚な技巧音楽やおどなりの曲目しか演奏されておらず、これらに飽き足りない音楽家たちが、意味のある企画に飢えていたからである。

そのコア・メンバーとしては、最も親近感のある三人、

巨匠ラロ → フリードヴィッヒ・ヴィーク  
キアリーナ → クララ・ヴィーク  
メリティス → メンデルスゾーン

として勝手になぞらえて、自分の小説「神童たち」や論評にも使われることになる。また、友人を口説いて、シュンケ、ライザー、クノル、ラケマン、ヘラー、ツッカルマリオほかを同志にしてしまった。まさに、ロベルトの人好きの性格が如実になったのである。

同盟のビジョンは、『新しい芸術の時代への闘い』としたが、政治思想や宗教論とはかけ離れていたから、イデオロギー的に皆を屈服させるというようことは皆無だった。仮想敵は、ダビデ王と同様に「フェリシテ人」として、彼らのどうでもよい日々流されている大多数の人々をフェリシテ人と呼んだ。同志の議論は、ユートピアみたいなおとぎ話に近く、稚戯に等しいのだが、ロベルトは周りに小さなコミュニティを作ろうとしていたのだ。ゆくゆくは、ヨーロッパにまたがる音楽業界誌により世論を拡散しようと目論んだ。

この考えは深遠であり、定着すると結構な共済力を発揮する。現代人の思想にもあり、自治体ごとに物凄い数のサークルが出来上がって登録されているが、ほとんどが芯を持たせることを忘却して、単なる寄合になってしまっている。ダヴィッド同盟には、核として音楽芸術があって、その成長のために作曲・演奏という活動マグマは、歴史が示すとおり、ロベルト、クララ、メンデルスゾーンたちが活火山として燃えたぎって、消えることはなかった。そして、その想いが実って、次の作品が生まれた。

### **ダヴィッド同盟舞曲集(18曲) 作品6 (27歳)**

[https://www.youtube.com/watch?v=T2m\\_eqBQ10k&list=RDT2m\\_eqBQ10k&start\\_radio=1&t=0](https://www.youtube.com/watch?v=T2m_eqBQ10k&list=RDT2m_eqBQ10k&start_radio=1&t=0)

1837年秋に作曲され、後に「フロrestanとオイゼビウス作曲」として自費出版されたもので、ロベルト自身これを回想して「ピアノを弾いていて幸せだった時といえば、これを作曲した時」と明言していたという。

## 音楽新報

1833年末に、23歳のロベルトによりダヴィッド同盟の初会合が開かれた。この結果、自分たちの発信メディアが必要という一つの結論が達して、方針が硬い伝統的な出版社を避けてマイナーなハルトマン出版社と提携することになった。それが、「ライプツィヒ音楽新報」であり、1834年4月に創刊できた。編集長は、クノル、ロベルト、ヴィーク、シュンケの4人であったが、実務的にはほとんどロベルトが引き受けた。その雑誌は、ライプツィヒ以外にも、プラハ、ドレスデン、ハンブルグなどにも拡がり、かなりの売れ行きだったという。

ついに、編集長兼評論家：ロベルトが誕生し、1835年、誌名も『音楽新報』にあらためられた。その精神と趣旨は、第2巻の巻頭論文で次のようにロベルトが述べている。

「我々の主権宣言は短い。……お互いにお世辞を言い合っている時代はまさに終わろうとしている。我々は、その時代の復活に寄与しようと欲するものではない。ある事について、最も悪いものを敢えて攻撃しようとしない者は、良いものを不十分にしか支持しないことになる……我々は、短い活動の間にもいろいろな経験を重ねてきた。我々の信念はずっと前から固まっている。それは簡潔であり、以下のようなものである。

ちょうど清らかな泉に触れて生気をとりもどすように、古い時代とその作品を、力強く復活させることによって、新しい芸術の美の回復を可能ならしめようとするものである。……それから、現在の作品、つまり外面的な名人芸の拡大に終始してしまっているものを、非芸術的なものとして克服し、——最後に新しい詩的な時代を用意し、一刻も早く迎えるために力を貸すものである。……」（若林健吉著「シューマン 愛と苦悩の生涯」より）

この宣言は革新というものである。ただし、古典を敬<sup>うやま</sup>いながらも、同時代のパガニーニのような技巧一点張りには手厳しい。詩的なものとは、ロベルトの場合は、彼の作品を味わう限り、夢想的な曲調が浮かんでくる。それは、ベートーヴェンの「月光」を敷衍<sup>ふえん</sup>したものと私はとらえている。だから、古典の「良いもの」を大事にしているのだ。だが、新たな境地を模索するという姿勢は明快きわまりない。業界情報誌としては貴重になるけれども、観念論になるから一般にはなかなか理解されることはない。音楽の詩的、夢想的、天上的な調べに反応した人にしか解らない。具体的には、メンデルスゾーンやクララ・ヴィークが典型であり、作曲と解釈演奏に悩む音楽家となるが、とっておきは、やがてのブラームスとなろう。結果的に、音楽新報の発行は、最後に、巨人ブラームスを覚醒させたことで、歴史的にも最大最高の功績をあげたのである。

1833年、23歳のロベルトは、14歳のクララとの文通交信で、次の佳曲を仕上げた。

### **クララ・ヴィークの主題による変奏曲 作品14**

<https://www.youtube.com/watch?v=NfgvQeE4BoM>

風邪を引いたロベルトへの見舞いの気持ちを、クララは自作の「ロマンスと変奏曲：作品3」により贈った。さっそく、ロベルトはその曲のテーマに基づいた作品5を作り、なんと、父のフリードリッヒ・ヴィークの誕生日に贈呈したのである。少し危ない橋を渡ったのだ。

この曲は、ベートーヴェンの『エロイカ変奏曲：作品35』を模範にしたという。それと、対位法の研究成果も表れているらしいから、師への恩返しの意も込められている。

## 交響的練習曲 作品13

クラシック巡礼の旅「交響的練習曲」

2010.1.21 2019.3.3改 別当 勉

これほど綺麗なピアノ曲は、聴いたことがない。シューマンの代表的なピアノ曲である。ショパンでは情熱的なロマンが感じられるが、全く異なる印象で、マロンの感触がする。

シューマンについては、長年の課題であった。膨大なクラシック・ライブラリーの中でも、僕の関心ではシューマン全体が埋もれてしまってきた。しかし、1970年代にマウリツィオ・ポリーニという天才ピアニストが出現して、彼の初期録音がショパンを中心に目白押しに出た。そこで、聴いてみたいと興味を沸かしてくれたのが、「交響的練習曲」である。作品13であるから、若い時の澀刺とした麗しさが滲みでた聴きやすいエチュードである。しかし、ピアノ曲に没頭した作曲家だから、さすがに弾く技術は、体操競技でいえばF難度らしい。それを練習曲としたのは、少しおかしいと思うのが普通ではないだろうか。たぶん、エチュードという言葉の核心に触れられずに、単純に日本語の「練習曲」と訳されたのかもしれない。ショパンの練習曲もそうだ。一流ピアニストでも練習になるくらいだから、剣法でいうと免許皆伝なみの型の演習とみた方が良い。ラフマニノフの練習曲などは、トップ・プロでも、なかなか近付かない。

かつ、このポリーニ盤におけるシューマンの練習曲は、明らかに全体で1曲のソナタみたいに感じられる。しかも、ショパンにも、ベートーヴェンにもない美しい香りがして仕方がない。シューマンの他のピアノ曲、子供の情景、幻想曲、クライスレリアーナなどもそうだ。

構成は、本来12曲のバリエーションなのであるが、遺作の5変奏を中に挟んで演奏されているから、3部から成っている。何となく、ピアノ・ソナタを意識してしまう。

すなわち、

第一部が、主題と5変奏

第二部が、遺作の5変奏

第三部が、7変奏

である。主題は、初恋のエルネステーネの父フリッケン男爵の曲から引いているとのことで、純真な慕情が感じられる。全体にその一貫性が敷かれているから、正に濃密な蘭の香りにうっとりする。第一部は、破滅を知らない若々しい夢のようなメロディに酔い痴れてしまう。

第二部は、遺作の部分であるが、うってかわって流れるようなバリエーションに溺れそうになる。打鍵の早さが弦楽器の連続音みたいに奏でられるのだから、耳にはたまらない。

第三部は、早いテンポのアレグレットみたいに聴ける。変奏とはいえ、ドラマチックに展開され、ピアノ曲の醍醐味に包まれる。最後の12番目の変奏はすさまじい。まるでダンス・バージョンとでもいうか、最長の6分かかるから、これだけで独立できるほどすごいダイナミズムだ。ちなみに、この最後の曲と、第3および第9の2曲も変奏でなく、他から引用したのだそうだが、違和感が全くないのはどうしたことか？ ここで採り上げたのは、ポリーニの演奏ゆえの構成である。他のピアニストの演

奏では、12変奏のあと遺作を付けるケースもあるという。

なお、交響的という冠詞は、シンフォニーの響きがするからということで後付けらしいが、それほど名曲と皆が感心をもったこと自体だけでも大変なことである。

#####

エルネスティーネ・フォン・フリッケン  
(1816年 - 1844年)



<https://ja.wikipedia.org/wiki/ロベルト・シューマン>

ボヘミアのフォン・フリッケン男爵の娘エルネスティーネとは、ロベルトが24歳のときに、ヴィーク家にヴィークの塾生として入ってきて出会った。一目惚れして、一気に婚約までしてしまった。彼より6歳年下で美貌の乙女だったが、やがて妻になるクララ（15歳）をさておいたことには疑問が消えない。

そんな事態を憂いた父のフリードヴィッヒは、直前に娘クララをドレスデンに留学させて、ロベルトとエルネスティーネとのしがらみ環境から隔離してしまった。クララ嬢には既にロベルトへの慕情が芽生えていたのだ。その辺りは、クララからロベルトへの手紙で明らかになっている。

なお、ロベルトは、エルネスティーネ以前にもヴィーク家手伝いの女性にも手を付けていたから、かなりの女好きでもあったのであろう。逆に観ると、好青年ロベルトは乙女たちを夢中にさせたのではないかとも思える。それは、後のクララとの恋愛で判明する。

それはともかくとして、エルネスティーネに惚れ込んだ恋心が、次の名曲で表わされる。

### 交響的練習曲(主題と17の変奏曲) 作品13 (24歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=NwVgkS-dS8>

最初の主題旋律は、彼女の父フリッケン男爵がアマチュアのフルート奏者でもあり、作曲もしていたらしく、その一部から採ったものという。言ってみれば、相手の親の同意も含めた婚約指輪のようなものと思えてしまう。しかしながら、しばらくして、エルネスティーネがフリッケン男爵の私生児ということが判り、ロベルトの腰が引けて、婚約を解消してしまっていた。情けない話であるが、ロベルトの軽さが露呈した。やはり、クララによる矯正が必要だったのではないだろうか。

されど、これを聴くと作曲家が羨ましくなる。妬みではないが、これほどの美曲を私も創れたら、と妄想すると、うっとりとしてしまう。それほど凄い。ロベルトの特徴である**夢想的**な音場がいっばいに広がる。エルネスティーネへの想いの熱さも感じ取れる。これを聴いても「シューマンは解らん」とは、絶対に言って欲しくない。

最近になって、田部京子の名演アルバムを取り寄せて聴いて、さらに私の胸はときめいた。田部の解釈と演奏は浪漫性に富んでおり、日本の女性ピアニストたちもクララに負けないほどになっているという実感がする。

実は、奇遇ともなろうか、この交響的練習曲に聴き惚れていた1980年代に、ジャズ・ピアニストのキース・ジャレットのライブ録音“ケルン・コンサート”にも私は陶醉していた。当時、とんでもないほど、このキースのインプロヴァイゼーション：即興演奏は、クラシック愛好家を魅了して止まなかった。感覚的には、酷似している。私にはそう感じられた。

この名曲を最初に、妹弟子であり婚約者でもあるエルネスティーネに弾かせたのか、それとも、難曲のため、もはや名人ともいふべき15歳のクララに弾いてもらったのかわからない。クララだとしたら、やがての大問題になるかもしれない。素人の疑問であるが、追々判明する。

さて、ロベルトのピアノ作品には、変奏曲が多いことから、バッハ研究に熱を入れたのであろう。それは、孤高の

### 『無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番 BWV1004 シャコンヌ』

の32変奏を研究した成果とも考えられる。ダヴィッド同盟でも議論されたにちがいない。当初、この交響的練習曲は主題と12変奏（遺作の5変奏は死後に追加）だったが、変奏回数が多いことは、かなりの創作意欲が感じられる。これは、ブラームスにも受け継がれて、交響曲第4番第4楽章にて見事に32変奏が再現されるのである。

原曲の『シャコンヌ』については、私のクラシック巡礼第1回「バッハの祈り」にて重点的に採り上げた。ブラームス：交響曲第4番第4楽章については、次回に述べることになる。

ちなみに、ロマン派作曲家の『バッハの無伴奏』に係る研究と挑戦については、次の結構なネット記事があり、参考のために掲げる。私は、ロベルトによるピアノ伴奏付き『無伴奏全6曲』の希少なCDを買ってしまっている。

<http://www.music.qub.ac.uk/tomita/essay/Toppan2.html> \*\*\*\*\*

バッハが一流の作曲家としての地位を獲得したのは19世紀になってからのことです。1802年に出版されたJ.N.フォルケルの『バッハの生涯、芸術および作品について』がその先駆者的存在となっています。この「バッハ伝」は、バッハの長男と次男から様々な情報をもとにしているため、今では立証不可能な史実を多く含んでいると考えられており、現在も貴重な研究資料としての価値を保っていますが、この本が書かれた当時は、ドイツ国民意識が台頭しつつありましたから、バッハは国民の大切な遺産であるという、もう一つの「国民の父」としてのバッハ像が打ち出されることとなったのです。このフォルケルの「バッハ伝」とほぼ同時に、バッハの作品もヨーロッパ各地で次々と出版され始めました。「無伴奏」全曲の初版は、ボンズイムロック社から1802年に刊行されています。これらの出版譜が競って出されたことで、今まで子弟関係を

中心に細々と伝承されていたバッハの作品が広く知れ渡るようになり、それに伴い、次世代のバッハ観も大きく変わっていきます。

「無伴奏」のなかでも特に高い関心を集めたのは、**パルティータ第2番の終曲である「シャコンヌ」**で、様々な演奏形態へと編曲されました。ピアノ伴奏を加えたものは、F.W.レッセル(1845)、メンデルスゾーン(1840-47)、シューマン(1853-54)のものが良く知られていますが、最後の二人の編曲は、第三者により再度アレンジされて出版されています。その他にも、A.ヴィルヘルミは小編成のオーケストラ伴奏(1885)を書いていますし、ピアノ用の自由な編曲ではC.D.van ブレイック(1855)、J.ラフ(1865-1867)、E.パウアー(1867)、**F. ブゾーニ(1893)**のものが知られています。

左手だけを使ってピアノで演奏するように編曲された**ブラームスのもの(1877-1879)**は、特に巧みにアレンジされています。その他にも、4手のためのものや、2台のピアノ、オルガン、ピアノ・トリオ、弦楽四重奏、チェロやヴィオラ用に忠実に編曲されたもの、2つのヴァイオリン、ギター、オーケストラ用などへも広く編曲されています。

このようにバッハのオリジナルを編曲することへの意義は、概して二つありました。一つは、ロマン派の音楽家が、バッハの楽想の豊かさに魅せられてしまったと言うことです。1840年にメンデルスゾーンが自らのピアノ伴奏で演奏した「無伴奏」(ヴァイオリン:F.ダーフィット)を聞いたシューマンは、「メンデルスゾーンは、バッハの原曲にあらゆる種類の声部を絡ませ、しかも聴衆に喜びを与えた」とその感想を述べています。そのシューマンも、後に自らピアノ伴奏をつけて出版していますが、彼はロマン派の思想からバッハの表現を感じ取っており、「無伴奏」の幅広い伝承に貢献しました。

このことについては、1877年にブラームスがクララ・シューマンへの書簡の一つで述べている感想が、ロマン派におけるバッハのイメージを的確に言い当てていると思います。

「シャコンヌは私にとって最も驚異的でかつ不可解な作品の一つです。ほんの一段の譜表で、ひとつの小さい楽器のために、この作曲家はこれほど深遠な思想と力強い感情の世界を創造したのです。もし私自身が靈感を得ることができてこの曲を作曲したと想像すると、その途方もない興奮と感動で気が狂ってしまったことでしょう。」

つまり、シューマンやブラームスを始め、多くのロマン派作曲家の目的の根底にある音楽哲学は、音楽的に不毛な時代に、そのインスピレーションを伝統(主にバロック時代の音楽)に求めた、ということです。

\*\*\*\*\*<音楽の父として:後世の作曲家からみた「バッハ無伴奏」の魅力 富田 庸>より\*\*\*\*\*

## クララ・ヴィーク

### 16歳のクララ



<https://wan.or.jp/article/show/6362>

ロベルトが25歳になると、次第に、クララの存在が彼の心中で大きくなった。クララは、父フリードリッヒ・ヴィークの指導よろしく、ピアノ・レッスンを主として、その他にも宗教、外国語、ヴァイオリン、音楽理論、和声法、対位法、管弦楽法、フーガ、作曲法など著名な教師のもとに学んでいた。かなりのインテリ女性に仕上がっており、演奏旅行という父の随伴であちこちと周れば回るほど、各地の若き紳士貴族たちに会い、数多く見てきたはずである。男を見る目は先鋭化して、次第にロベルトに本能的に注視はじめたのではないだろうか。16歳ごろの女性の精神年齢は、プラス5、6歳とも聞く。しかも、ピアノ曲についてのクララの評価は、演奏家としておそらく欧州トップ

レベルであったことは、想像に難くない。弾いた曲目は、バッハから、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトといった錚々たる大家の作品にわたり、音楽センスが磨かれたから、ロベルト作品の天にも届くほどの価値は、容易に鑑定できたはずである。

年の初めに、16歳のクララは父とともに、北ドイツ方面に演奏旅行に出かけ、4月に帰参してから、3ヶ月ほどロベルトと過ごしている。

その後、ロベルトは転居するが、先に述べたようにエルネスティーネとの婚約を解消した。エルネスティーネは穏やかに受け容れたようである。背景に、クララへの接近があり、この時期にクララへ気持ちが大きく傾いていったと言われている。フロレスタンとオイゼビウスから、「クララへの心の叫び」と題して

### ピアノ・ソナタ第1番 嬰へ短調 作品11 (25歳)

<https://www.youtube.com/watch?v=7-ZrqXG1kEs>

がクララに捧げられた。この第一楽章の前半は、沈痛ながらもクララへの想いが籠った曲想に、何度聴いてもその夢想的浪漫性に曳きずり込まれてしまう。

さらに、10月に完成したピアノ・ソナタ第2番作品22は、悶えもあって激情的である。

### クララとロベルト



<https://plaza.rakuten.co.jp/bartok/diary/2012092>

10001/

年末には、「オイゼビウスのキアリーナへの熱烈な手紙」第1回が音楽新報に掲載されることになって、ロベルトの本気度が露出した。オイゼビウス（またはフロrestan）はロベルト、キアリーナはクララとして音楽新報の記事に現れる仮想の登場人物である。

この結果、二人のただならぬ関係によろやく気付いたフリードリッヒは絶叫して、狂乱状態に陥ったことは容易に想像できる。この世で唯一の生き甲斐が奪われることになるから。でも、昨今では、ファーザー・コンプレックスの娘は嫁いでも、幸せになれないという話もあり、親元を抜け出すということは「巣立ち」として正常な発育の結実なのである。野生のケモノ然りである。しかし、父は絶望という終点を見たくなかった。おそらく、涙ぐましい

フリードリッヒ・ヴィーク



<https://plaza.rakuten.co.jp/bartok/diary/201209210001/>

ほど手塩にかけて<sup>はぐく</sup>育んだ天才娘の<sup>むこ</sup>婿は、そのうち自分が探してやるとの<sup>とら</sup>想いに囚われていたのにちがいない。

この父は、なんと、今どきの親馬鹿を超えて意地悪い行動に出てしまい、さっそく、クララを長期の演奏旅行に出したのだから、あきれろ。こういった妨害行為は頻りに徹底して行われたのであった。娘にロベルトへの接近禁止命令を出して隔離さえも<sup>いと</sup>厭わなかった。フリードリッヒの度を越えた錯乱は、まさに発狂したと言われてもしょうがないけれども、これも歴史なのである。彼は、冷静にクララの<sup>うかが</sup>気持ちを<sup>おのれ</sup>覗き、己の態度を決めるべきであった。

だから、余計にクララをロベルトに近づけてしまうということも判断できなかった。ロベルトは容姿端麗で、美しいピアノ曲を創り続けている将来性豊かな作曲家なのであるから、うら若き乙女の瞳が見つめてしまうのは自然の成行きであろう。逆に、博識のフリードリッヒという音楽専門家が、そういったロベルトを見定めろという見識さえ忘却してしまうのである。だが、クララは決意してしまったのだ。ロベルトはわたしの男だと。こうなると女は強く逞しい。たとえ、親だろろうが鬼だろろうが敵視してとことん闘う。恋した男以外、誰も手が付けられない。

そんなクララの心理動機がうかがえる事件が起きた。1836年2月には、ドレスデンにおけるコンサート・ツアーに、無理やり出されていたクララに、こっそりとロベルトが会いに来た。フリードリッヒの留守中だったが、これを知った父は激昂して、次にロベルトが来たら射殺するとして娘を脅した。クララは震えて立ちつくしたという。さらに、文通を禁じ

てこれまでの手紙をすべてロベルトに返送するよう厳命された。父はついに、逃げ場のないコーナーに娘を追い詰めて、まさに、“<sup>きゅうそ</sup>窮鼠、猫を囓む”という事態を招いてしまったのだ。

一方、ロベルトは愛しい<sup>いと</sup>クララへの想いがつのるばかりなのだが、いかんせん、16歳の乙女である。親から引き離して、二人で夜逃げするわけには行かない。親の養護権利はれっきとして存在する年頃であるのだから。悶々とするが、この満たされない不安こそ、芸術家の創作エネルギーに化合される結果を産むのだ。自然に、ロベルトの慕情が込められた次の名曲が誕生した。

### ファンタジー(幻想曲) ハ長調 作品17 (26歳～29歳)

[https://www.youtube.com/watch?v=xvBm3qqb\\_Cw](https://www.youtube.com/watch?v=xvBm3qqb_Cw)

この曲には、ベートーヴェンの『遥かな恋人に』から“受けたまえこの歌を”の旋律が引用されていると聞く。実際には、

**『遥かな恋人に』 第6曲 “さあ愛する君よ、受け取っておくれ。以前に歌ったこの歌を”**

の部分のようであるが、私にはどうも、どこにどの旋律が使われているのか判別できない。それは別にして、詩文は、まさにラブ・コールである。こういった名曲による愛情表現は、名作曲家と達人ピアニストの間柄だから出来たのである。この夢のような意思疎通は、ベートーヴェンならどう思うだろうか。文通も頻繁に行われたが、フリードリッヒはそれさえも家宰に言いつけて遮断したという。

しかし、この曲は一般的には難解である。私も、既に30回以上聴いてきたが、「クララのテーマ」や「ベートーヴェンの主題」が浮き立ってこない。これがそうだと思っても、出ては消えていくから、ロベルトの上手さに舌を巻いている。彼が執心したショパンの「バラード第1番」に、そういった意味で似ているかもしれない。ただし、第3楽章のアダージョは夢想的で心地よい。

もともと、この幻想曲：作品17の第1楽章は、ボンで計画されていたベートーヴェン記念碑のために寄付金集めの一環として作曲したというから、表面的には肯けるが、内心はちがった。第2楽章と第3楽章はあとで追加されて完成されたらしい。

聴感上は、次のように感じ取れる。

第1楽章：“どこまでも幻想的に、そして情熱的に演奏するよう”（楽譜の指定）

熱情的に始まって、ロベルトが“クララへの深い嘆き”と呼んでいたように、浪漫的哀感が、押し寄せる波のように漂っているのだ。フリードリッヒに鉄格子で交信断絶させられたクララへの想いが歌われる。あたかも、オオカミ王ロボが、捕らえられてしまった雌オオカミの純白のブランカに哀しげに遠吠えす

るのである。シートン動物記「オオカミ王ロボ」の悲哀を想い浮かべて、当てはめてしまったが、いつもの私の瞬間的連想である。

第2楽章：“中庸の速さで、あくまでもエネルギーに”（楽譜の指定）

「クララのテーマ」によって軽快に跳ねる。聴きやすい。

第3楽章：“緩やかに、どこまでもおだやかさを保つように”（楽譜の指定）

ハ長調なのだが、あたかも嬰ハ短調のベートーヴェンの「月光」の複写のように始まる。喩えようもなく幻想的であり、つる想いでうるさい魂の騒動がみごとに治まってくる。

この曲の出版は1939年だが、それ以前にクララは密かに第1楽章のスケッチ楽譜を手に入れて、ロベルトの熱愛を受け止めていたにちがいない。そして、彼の想いを確信したのであろう。

## ショパン

遙かなパリで活躍中のショパンがやってきた。1835年夏、保養地カールスバートの両親を見舞ってから、ドレスデンを経由しての戻り道だった。ショパンは、ロベルトの

『天才だ！ 諸君、帽子をとりたまえ』

という記事に対する礼もあったのだろう。来訪の知らせを受けてから待ちわびたロベルトは、次のように浮足たった。

「ショパンが来た——フロrestanは彼に駆け寄った。私は彼らが腕を組み合わせて歩くというよりは、飛び立つように行くのをみた。—オイゼビウス」

散歩に出かけていたクララが戻ってくると、右手指に障害を残しているロベルトが少し苛みているのをみて、クララは早速、ロベルトの《ピアノ・ソナタ第1番嬰へ短調》とショパンの協奏曲の一部とエチュードを弾いてもてなした。ショパンは、涙を浮かべて感動し、返礼に自分の《夜想曲作品9の2》ほかを聴かせた。そして、16歳のクララの演奏を絶賛したという。とくに、エチュード：作品10については、リストさえもつまず躓いて雲隠れしたのに、16歳の見目麗しい乙女が見事に弾ききったのには、ショパンは驚嘆したのだった。

このような交流は、まさに夢のようであり、ドイツ・ロマン派音楽の書物では必ず引合いに出されている。この時のショパンの演奏について、クララは「ルバートが誇張され過ぎて、気まぐれ」と鋭く評価していたという。“ルバート”とは、テンポ・ルバートを略しているが、感情の起伏に応じて、楽曲の速度すなわちテンポを自由に加減して演奏することのようである。だが、それがショパンの特徴であり、パリではそれが人気になっていることまでは想像できなかった。このとき、ドレスデンで、クララと同年のマリア・ヴォジンスカに魅せられてきたばかりのショパンは、クララに“マリア”を映して視ていたという。このことは、私の「クラシック巡礼第3回：ショパン」において詳しく触れた。

ショパンの2度目の来訪は、1836年9月だった。やはり、ドレスデンからの帰り道で、マリア・ヴォジンスカとの婚約が済んで、晴れやかな気分だった。ヴィーク家にて、クララに会い、お互いにピアノを弾いてトップ・プロ同志の交流をしたが、ロベルトとは別々に会ったようである。さすがに、ロベルト、クララ、フリードリッヒのヒビ関係に深い罅が入っているとは気付かなかった。

それでも、相互に敬愛を感じたロベルトとはけっこうな時間を過ごして、ショパンは新作の「バラード第1番ト短調」を弾いてみせたところ、ロベルトはもろ手を挙げて感激したという。確かに、この曲はわだかまる愛想を払いのけて、突き進んでおのれを開放していく痛快さがにじみ出ている。ロベルトに「バラード第1番」を絶賛されたショパンは、その献呈先が決まっていたので、「バラード第2番」を献呈することにした。お返しに、ロベルトはやがて「クライスレリアーナ：作品16」をショパンに捧げる。

## 幻想小曲集 作品12

<https://www.youtube.com/watch?v=GSCIQsiA8IE>

1837年(27歳)には、すでにクララとの関係の未来に暗雲がたれこめ始めていた。ロベルトを代表する最高の名曲『幻想曲作品17』が、あしかけ3年もかけて完成される途中での傑作である。作曲するきっかけは、スコットランドのピアニスト:ロペーナ・レイドローとの交際だったという。曲想は、ホフマンの「カロ風の幻想小品集」に由来している。

ロベルトの苦悩や恋愛事情が創作に影響して、この曲集ほどそれを受けた作品もない。自分の愛する女性がこれほどまでに創作に影響し、そしてこれほどの数を立て続けに完成させ得た例は、音楽史でも稀である。一方、『幻想小曲集』を待ち望んだクララは、完成した時はウィーンにいたが、これを好んで弾いたそう。

ロベルトという作曲家は、ある一時期に特定のジャンルの音楽、たとえば変奏曲を集中的に手がけるといふやりかたが見られる。ピアノ音楽はクララとの結婚前に、彼の名作・傑作たちはほぼ出揃ってしまい、1940年は「歌の年」、1941年は「交響曲の年」、1942年は「室内楽の年」などと言われたりする。クララとの恋愛が示すとおり、何かひとつのものに集中すると他が目に入らなくなる性格は如実であったともいえる。

第1曲「夕べに」は曲集中最も美しい音楽であり、またクララへのシューマンの想いのように感傷的。それでいてメロディは素朴で、アンコール曲としてもよく遭遇。

第2曲「飛翔」もまたアンコール曲として取り上げられることがあり、曲集中でも有名。曲集中の白眉であり一つのクライマックス。極めてファンタジックでダイナミックな音楽である。

第3曲「なぜに」は、非常に繊細な表現が要求される音楽。

第4曲「気まぐれ」は、わりと決然とした足取りで始まり、まるで中途半端な行進曲調。タイトル通りといえば中間部の曲想の変転は、確かに「気まぐれ」な感じがあるかも。

第5曲「夜に」は幻想小曲集全体の中心楽章。波頭のような流れの伴奏の上に3連符の上昇メロディが顔を出し、荒れ狂う海の描写を思わせる。

第6曲「寓話」は、冒頭に登場する愛のため息のような山なりの音階が織り成す音楽と、続くスケルツォ的なユーモアの躍動する音楽とが交代して成り立っている。

第7曲「夢のもつれ」はまったくスケルツォのような音楽。主部の駆け回るような楽しい場面と、中間部(スケルツォにおけるトリオ)のコラールのような進行の対比がおもしろい。

第8曲「夢の終わり」は曲集中最大の規模を与えられています。タイトルが語るほどにセンチメンタルな雰囲気はなく、むしろ終曲らしい明朗なダイナミズムが特徴。

## ピアノ・ソナタ

### ピアノ・ソナタ 第1番 嬰へ短調 第1楽章 Op.11

<https://www.youtube.com/watch?v=KmMiUvhCIHg>

ロベルトのピアノ・ソナタについての感慨について述べなければならない。

彼の作曲は数少なく3曲である。ほとんどのピアノ曲は変奏曲であった。ロベルトの嗜好はバリエーションに向いていたのである。これは、多分にロマン派の作曲家である、ロベルト、ショパン、メンデルスゾーン、リスト、ブラームスなどに共通している。ベートーヴェンに憧れながら、ピアノ・ソナタを離れて、より自由な形態を模索した結果なのであろう。楽章の構造も、《提示部—展開部—再現部》という古典的なソナタ形式を採ることに拘らなくなった。

25歳のときに、ロベルトは既にピアノ・ソナタに生命感の乏しいことを次のように指摘していた。

「この形式での立派な作品は今までにいくつか現れたし、今後も公けにされるだろう。しかし、大局的には、この形式は行き着くところまで来てしまったようである。それは当然のことなのだ。我々は幾世紀も同じ形式を繰り返しているわけにはいかない。我々は何か新しいものを想像することを考えるべきである。そこで作曲者が欲するなら、ソナタであれ、幻想曲であれ、名が何であろうと、好むように書かせなさい。……」（若林健吉著「シューマン 愛と苦悩の生涯」より）

\*\*\*\*\*

さすがに、天平の伽藍のごとき「ソナタ形式」は楽曲形成の決定的ガイドとなるため、交響曲、協奏曲、四重奏曲などでは、必要に迫られたのか知れないが、ソナタ形式まで完全に別離してはいない。「古典を敬<sup>うやま</sup>う」研究成果は活かされている。

## メンデルスゾーン

一方、ライプツィヒの街の1835年の出来事を観てみよう。めでたく、ロベルトより一つ年上のメンデルスゾーン(1809-1847)が、若干26歳でゲヴァントハウス・カペルマイスター(楽長)になった。いわば、世界最古のライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の音楽監督兼常任指揮者となったのである。



<http://ja036985.seesaa.net/article/130107421.html>

この管弦楽団の創立は1743年であり、小規模だったが、バッハ生存中に出来たのである。バッハは、聖トーマス教会のカントール(音楽監督)として、200曲余のカンタータなど宗教曲の名作を生み出すと同時に、コレギウム・ムジクムという在野の団体の公演にも関わった。このような公開演奏会の伝統に根ざすのが、世界最古の民間オーケストラ、ゲヴァントハウス管弦楽団である。

1823年、メンデルスゾーンが14才の時、祖母からのクリスマスプレゼントは、『マタイ受難曲』の自筆稿の写譜であった。彼とこの曲との関わりは、この時に始まる。この自筆稿は、彼の師匠であったベルリンのジングアカデミーの会長、カール・フリードリッヒ・ツェルターが所有していたものである。彼は、ジングアカデミーの図書室に、バッハの自筆稿を収集していた。この楽譜に刺激されたメンデルスゾーンは、1829年3月11日、ジングアカデミーで歴史的な復活上演を果たした。前売り券が数時間のうちに売り切れてしまうという人気のなかで、大成功をおさめた。

弱冠20歳のメンデルスゾーンの炯眼<sup>けいがん</sup>と熱意に、私の感激はひとかたならぬほど感動して、ありとあらゆる機会にてこれを語り継いできた。音楽の最高峰『マタイ受難曲』をこの世に再現した彼の功績は、世界人類的観点からみてもはかりしれない。

こういった白哲でもあるメンデルスゾーンとは、ロベルトとの関係がさらに緊密になり、かなり強力な助っ人になったのだ。

クララとの恋愛において、フリードリッヒの頑迷な邪魔が入り、暗礁に乗り上げてしまったロベルトには、内心の不安が消えてくれない。でも、友人の躍進には、ひとかたならぬ慶びがあったはずである。

## 現在のゲヴァントハウス(コンサートホール)



[http://languages.leipzig.travel/jp/\\_1366.html](http://languages.leipzig.travel/jp/_1366.html)

### ゲヴァントハウス内のコンサートホール



<https://t.pia.jp/pia/event/event.do?eventBundleCd=b1928181>

1835年11月に、16歳のクララは、メンデルスゾーンの指揮のもとにゲヴァントハウスにて自作のピアノ協奏曲を弾いた。併せて、古典的にめずらしいバッハの「3台のクラヴィアのための協奏曲」をメンデルスゾーンと共に共演したのである。これは、バッハが活躍したライプツィヒで演奏されたのは、50年ぶりのことだったが、メンデルスゾーンによるバッハの復興運動の始まりでもあったのだ。その彼は、クララを「小さな鬼神のようだった」と家族に書いたと言う。

こういったロベルトやクララとの交流は親密になり、ロベルトは彼を知った日から、メンデルスゾーンを理想の音楽家と仰ぎ見て、終生、尊敬し続けたと言う。逆に、友人として彼は、度々、ロベルトに助力した。

.....

それから10年ほど経って、ライプツィヒを離れてドレスデンに移って活動していたロベルトのところにメンデルスゾーン急逝の知らせがきた。

メンデルスゾーンは晩年、神経症の悪化と過労によるものと思われる不健康に苦しめられた。イングランドへの最後の演奏旅行は、その過密日程から彼を疲弊させ、病へと追いやった。1847年、ライプツィヒで度重なる発作の末、帰らぬ人となった。38歳だった。死因はクモ膜下出血と伝えられている。

ロベルトとクララの心痛は想像にあまるものがあった。ロベルトは彼の死をいたみ、『思い出』を書いた。その葬儀にロベルトは住んでいるドレスデンからライプツィヒに急行して、棺に付き添った。一番頼りにしていた音楽家であり、クララは「彼は芸術家としてばかりでなく、人間として友として私たちに親しい人であった。」と書いている。とにかく、神経症に悩んでいたロベルトへの打撃はおおきかった。

## 闘争

1837年は、クララを、ロベルトとの交信断絶という檻おりに入れてしまったフリードリッヒを恨みながら、27歳にもなったロベルトにとって辛い時期だった。ヤケ酒と自暴自棄な生活をおくるばかりだったが、最後の手紙から18ヶ月過ぎた頃、いきなり、クララが沈黙を破った。彼女のリサイタルへの招待状が届いた。なんと、クララは、ロベルトが想いを込めてエルネスティーネに捧げた「交響的練習曲作品13」を演奏したのである。

その結果、18歳になったクララは、かつてのロベルトのプロポーズを受け容れて、明快に「いいわ」と返答して、婚約してしまった。当然、父フリードリッヒの承諾を経なかった。そして、二人は1839年末までに、275通の手紙を交わして、お互いを繋ぎ止め合った。文通遮断を破ったのはクララ自身であるらしいが。

俄にわかに生氣をとりもどしたロベルトは、1837年9月に、フリードリッヒにクララとの結婚を申し込んだが、一瞥で無視された。さっそく、クララは父に7ヶ月に及ぶコンサート・ツアーに連れ出されてしまった。ふたたび、妨害が徹底しはじめたのである。

それでも、1838年は頻繁に文通が交わされ、この年だけで100通を超えた。

この頃、ロベルトは愛らしい小品をスケッチ始めて、

### 子供の情景(13曲)作品15

<https://www.youtube.com/watch?v=FrhuDzWdhZ4>

が完成した。

ロベルトからクララへ 1838年3月17日（若林健吉著「シューマン 愛と苦悩の生涯」より）

私は子供のエプロンをつけていた頃の気持ちに帰って、30の奇妙な小曲を作りました。その中から《子供の情景》と名付けました。あなたは楽しんでくれるでしょう。しかし、あなたは自分がピアノの名手であることを忘れてくれなければいけません。——次のような名前がついています。—びっくり、炉ばたにて—鬼ごっこ—おねだり—木馬の騎士—見知らぬ国から—珍しいお話—などなど。

《子供の情景》作品15は、有名な「トロイメライ」を含む13曲のピアノ小品集である。この曲「トロイメライ」はロベルトが幸福なときに作曲されたい。実際、この曲に流れている感情は夢想と言うよりも敬虔な祈りに近い。クララは「誰に献呈しますか?」と尋ねているが、二人だけのものらしく誰にもされていない。

また、ロベルトと言え、必ず現代ピアニストが採り上げる傑作

### クライスレリアーナ 作品16

<https://www.youtube.com/watch?v=PqNbZO2LXrA>

という抒情性豊かなピアノ曲も産まれた。作家というのは、蓋し、悶え苦しむたびに名作が産まれる。ということに、今更ながら思い知らされる。

ロベルトからクララへ 1838年4月14日（若林健吉著「シューマン 愛と苦悩の生涯」より）

おお、クララ、今、私の心にこんなにも音楽があふれ、こんなに美しい旋律がいつも聴こえるのです。まあ、聴いてください。あなたに最後のお手紙を書いてから、私は新しい曲集を作り上げました。

《クライスレリアーナ》と名付けました。あなたとあなたへの想いが中心です。あなたにこの曲を捧げます。ええ、あなたにで他の誰にでもありません。きっとあなたは、曲の中に自分の姿を見い出されて微笑まれることでしょう。……今の私の音楽は簡素でありながら、驚くほど錯綜して現れます。心から直接に流れ出て、誰の心にも感動を呼び起こします。……

この《クライスレリアーナ》は、8曲の幻想曲集である。題名は、ロベルトの好んだホフマンの創作したヨハネス・クライスラー楽長という人物から思いついたものである。作家であり、音楽家しかも画家であり、裁判官でもあったホフマンは、自作の小説の中で、この楽長に自分の音楽観を語らせている。このロマンティックな楽長にロベルトは共鳴した。——この曲は、手紙ではクララにと書いたのに、ショパンに捧げられた。

1838年5月には、父娘一行はライプツィヒに戻ってきた。ご機嫌になったフリードリッヒは、ライプツィヒ以外に住むことを条件として譲歩案を、ロベルトとクララに提示した。間を置かず父娘たちはウィーンに出かけてしまったが、クララの演奏が絶賛を浴びて、クララに「宮廷音楽家」の称号が与えられた。クララからの報告により、ウィーンこそ将来性ありとして、ロベルトは下見に出かけたが、意外に冷たく、音楽新報の発行もままならず、落胆して帰参した。ところが、フリードリッヒからのロベルト誹謗の回状が要人たちに通知され、妨害されていた。ウィーン進出は諦めざるを得なかった。

わずか半年のウィーン滞在で、ロベルトは10曲ほどのピアノ曲を創った。なんというべきか、この創作熱は。その中で際立つものは次の曲である。

### アラベスク 作品18

[https://www.youtube.com/watch?v=hkGcB\\_7SsOg](https://www.youtube.com/watch?v=hkGcB_7SsOg)

このアラベスクでは、ハ長調の優美な旋律が3回あらわれる。そこはかたないファンタジーの雰囲気をつたえ、異国的な情緒が感じられる。

1839年になると、パリで活動しているクララから、フリードリッヒの考えが知らされた。クララに対して、婚約を破棄しないなら、彼女の相続権を剥奪して、報酬も没収するという、鬼のような提案である。ロベルトには、年収は2000ターラー（約1千万円）以上であること、住まいはライプツィヒがあるザクセン地方外にすること、など厳しい条件が付けられた。

[註] 19世紀のドイツ域の1ターラーは、銀貨の銀の含有量で約1500円という値があるが、物価レベルを換算すると数千円という値が妥当となるようであるから、ここでは1ターラー＝5千円とした。

ロベルトは、さっそく大学で学んだ法律をレビューして、己れとクララの財産と収入を調べて集計した結果、年間収入が1400ターラー（約7百万円）を超えたから、生活は問題なしという結論を得た。

ついに、二人は敢然として告訴し、ライプツィヒ法廷に持ち込むことにした。

### フリードリッヒが父として結婚に同意するか、または 父の同意なしに二人の結婚を法廷が許可するか

という裁きにかかることになったのである。

フリードリッヒの常套手段として、誹謗中傷の手紙を知り得る限りの役所の要人たちに送り、ロベルトを追い込んだ。フリードリッヒの逆上は、娘にも及び、娘の演奏会まで妨害をはじめたが、逆に、クララとロベルトの結束はより強固になっていった。裁判所における、双方の激しいやりとりは、年末まで続いたが、1840年1月に一次判決が言い渡された。フリードリッヒは二人の結婚に反対する理由として、あることないことを書き連ねたロベルトに関する「罪状報告書」は、却下されたのである。

それでも、彼は懲りずに控訴した。7月まで争った結果、ようやく、二人の結婚の許可という裁定がおりた。なんと、告訴から1年も要したのである。この間に、クララは演奏会に傾注し、パリでシューマン・チクルスとして、〈謝肉祭〉、〈交響的練習曲〉、〈子供の情景〉、〈幻想曲〉など、恋しいロベルトの傑作たちを自信に満ちた姿で披露していた。彼女は、すでに単独で自分のコンサートのプロモーションが出来ていたのである。

クララの誕生日の前日、1840年9月12日に二人はめでたく結婚式をあげた。ロベルト30歳、クララ21歳のおしどり夫婦が誕生した。

これほどの闘争は、余り聴いたことがない。クラシック音楽界では、稀にみられることであろう。人間性を失ったフリードリッヒの我武者羅な行動と辛辣な妨害もめずらしい。

こういった師匠と子弟との間の、熾烈なクララ取合い合戦の背景には、既に、フリードリッヒに音楽を習い始めたロベルトが20歳の頃から、その種が芽吹いていたことがあった。それは、高校教師みたいに文部省指導要領よろしく固型教育にはめ込もうとする師匠のリードに、ロベルトは不満だったのだ。モシュレスのような作曲家兼演奏家を憧憬していたからであるが。残念ながらフリードリッヒには望むべくもない。

ロベルトの頭脳には、フリードリッヒの思考を遥かに超えた浪漫的ビジョンが、持てあますほど豊かに広がっていた。要するに、ロベルトは、音楽的想念において師匠のレベルを凌駕していたと言える。つまり、芸術の創作には、苦難どころか、本来的な魂の蠢きの産物である「表現」という能力に加えて生を消耗するほどの命のパワーが必要なのである。そのような想いは、市井のしがたない音楽塾長：フリードリッヒには悟れない。ロベルトの母からロベルトを預かったときにも、せいぜい「一流の音楽教育者」に育て上げるという程度の目標しかなかった。貧乏な二流音楽家ばかりみてきた母は、音楽では生計がたたないと観念し

て心配していたが、フリードリッヒの言で安堵したと言われている。ロベルトがやがてドイツ・ロマン派を牽引する白頭鷲になることなど、二人とも夢にも思わなかった。

トンビは永遠に鷹を養育できない。でも、ロベルトの才能を見抜いたともいえる乙女クララの慧眼には、驚くばかりである。ゆえに、死ぬまでつがう雌の白頭鷲になった彼女は、ロベルトの「同志」になり、演奏技術でもってロベルトの「広告塔」を買って出たのである。

なお、いわずもがなになるが、クララの孝心は、親と同じように子育て経験を積んでから、胸に染みしてくるのだろう。それまでは、自分の容姿も、技能も、幸福もすべて自分ゆえのものと思い込んでしまうから。これは人間の心の成長道程と考えられる。

クララがあれほど闘って勝利した父フリードリッヒとは、当然のように、疎遠となったが、ロベルトと結婚後、3年ほど経った1843年に、父娘の和解を成し遂げている。それは、次の手紙で父からの歩み寄りをうかがったからである。

フリードリッヒよりクララへ

「私は、今でも芸術に対する純真な愛好を持ち続けている。それ故に私がお前の才能豊かな夫の作品を認めないということはある得ないのだ。この手紙で、私は全ての批評家から称賛されているお前の夫の最近の作品の公開の機会を、前もって知らせしてくれるようお願いする。そのためには、(ドレスデンから)ライプツィヒに行ってもよい。お前の夫も私も頑なな頭を持っている。——それは改めることはできまい——しかし頭には内容がある。私が彼の労作と創造力に対して正しい態度をとったとしても、それは驚くに当たらない。すぐにドレスデンに来て欲しい。そして五重奏曲を持ってきて欲しい。」(若林健吉著「シューマン 愛と苦悩の生涯」より)

これをクララから見せられたロベルトは、すぐにドレスデンに行くよう薦めた。ロベルトはフリードリッヒとの<sup>わだかま</sup>蟠りを水に流したのである。

## リスト

フリードリッヒとの熾烈な法廷闘争は1839年、ロベルト29歳のときに始まったが、その前のクララ（20歳）との婚約により、二人はより緊密になっていて、絶望から抜け出してロベルトの気分は安定していた。ウィーン・ツアー中のクララからの情報により、ウィーン進出を夢見ていた。

1838年、ウィーンにおけるクララの演奏は称賛を浴びていた。ショパンからクララのことを聞いていたリストは、ウィーン滞在中のヴィーク父娘を訪ねた。

ウィーンにおけるリストの演奏は、度を超えて激しくピアノの弦（鋼線）を3台も、弾き切るほどであったが、ウィーン市民を絶叫させたという。まさに、キーボードの暴れん坊であった。たぶん、パガニーニの演奏に触発されたのであろう。こんな演奏を目の当たりにしたクララは、次のように手紙でロベルトに告げている。

クララからロベルトへ

「私達はリストを聴きました。彼は他の演奏者と比較することができません。——リストはただ一人。彼は恐怖と驚異を巻き起こす。そして、非常に魅力のある人。——彼の熱情は止まるところを知らない。多くではありませんが、旋律を切れ切れにして、人の感覚を苛立たせます。ペダルを使い過ぎるので、彼の作品を専門家はともかくも、アマチュアには判りにくくしているのです。知力が非常に優れており、“彼の芸術は彼の人生だ”と言うことができます。」  
（若林健吉著「シューマン 愛と苦悩の生涯」より）

リストは、ウィーンでクララに会って、ロベルトの『謝肉祭』を彼女が弾いて聴かせたところ、深い感銘を受けたという。友人に、「彼女の才能は私を喜ばせた。テクニック、感情の深さと真摯さを完全に身につけている。とくに、その気品の高い演奏態度は注目に値する。」と書き送っている。

なお、この前の年には、リストはシューマンの作品をパリの「ガゼット・ミュージカーレ誌」において称賛している。これを読んだロベルトは、「ドイツはフランツ・リスト氏を歓迎する」と手紙で返答していた。

それほど敬意を抱いたロベルトは、とっておきの《幻想曲ハ長調作品17》ほかを献呈した。これを受けたリストは、1839年6月、「靈感に溢れ、構成がしっかりして、私に素晴らしく感じられる。《幻想曲》は最高に位する作品です。……このような堂々とした作品を私に献呈くださったことについて、心からの誇りを禁じえません。それ故に、私は練習し、細部まで徹底的に研究し、できる限りの効果を上げたいと思っています。」と書いて、ロベルトに謝意を表した。

ようやく1840年3月に、ロベルト&クララは法廷闘争で一息ついたとき、リストがライプツィヒにやってきた。そこで演奏会をリストは開いたが、意外に人気は上がらなかつ

た。リストはいつものとおり新聞社などに招待状を出さなかった。また、ロベルト&クララの法廷闘争を聞いていたので、二人へ同情心を燃やして、リストはフリードリッヒも無視した。この人らしく、リストに関する悪評をあちこちと触れ回った。これを漏れ聞いた娘のクララは胸がいたんだ。

ロベルトは、ドレスデンで初対面してからライプツィヒに汽車で同行した。この時代、鉄道が敷設され始めたのである。リストのライプツィヒ演奏会も参席して聴いたロベルトの評価は次のようであった。

ロベルトからクララへ

「なんという驚異的な弾き方をする男だろう。——大胆で激しく、次にまた優しく絶妙な音を響かせる。全て前から聞いていたが、彼の世界は決して私の世界ではない。クララが弾いて、私がピアノで作曲するときのような芸術、このやさしい親しさを、私はリストの絢爛けんらんさと取り換えようとは思わない。——実際そこには虚飾が多すぎる。」

(若林健吉著「シューマン 愛と苦悩の生涯」より)

第1回演奏会についての新聞の悪評は、リストをくさらして第2回をドタキャンした。このため、延期となったが、ロベルトの困惑に応じて事態収拾にメンデルスゾーンが動いた。ゲヴァントハウスでオーケストラを動員することにより大演奏会を催して、シューベルトの交響曲第9番のほか、バッハの三重協奏曲をリスト、メンデルスゾーン、ヒラーの三人で弾き、リストはシューベルトの《魔王》編曲版を披露して、聴衆の熱狂的な喝采を浴び、キーボードの暴れん坊は面目躍如とした。

さすがに、リストはご機嫌になって、ヒラーが開いたディナー・パーティでは、メンデルスゾーンやロベルトに愛想良く話し込んだという。こうして、4月になってリストはパリに帰投した。

ロベルトはリストの押し出しの強い豪華性よりも、ショパン楽曲の甘美な悲観性に魅かれていたのではないかと、私は想像してしまう。それは、随所に現れる優美な浪漫性に満ちたロベルト旋律を聞けば一目瞭然であろう。特に歌曲である。情景を描写するシューベルトに対比すると、ロベルトは人間臭い情念にとらわれて夢のように仕上げている。この点では、自然に明らかになるように、暴れん坊：リストは特異な存在に置かれていたのではないだろうか。

## 歌曲

法廷闘争の最中でも、1940年はロベルトにとって、**歌曲の年**ともなった。追い詰められてもクララが絶対に離れなかったことで、彼の創作マグマは燃えたぎった。続けざまに、

**リーダークライス** 作品24 (アイヒェンドルフの詩による)

**詩人の恋** 作品48 (ハイネの詩による)

**女の愛と生涯** 作品42 (シャミッソーの詩による)

という、ロベルトの三大歌曲集が誕生した。リーダークライスとは、ドイツ語で連作歌曲集のことである。いずれも、シューベルトに肩を並べる珠玉のリートであり、クラシック音楽において燦然と輝いており、現代の歌手たちも競ってレコーディングしている。

私は、テノール歌手：フリッツ・ヴンダーリッヒが歌った《詩人の恋》に魅了されている。男心の歌に、出だしからどうしようもないほど陶酔し、神経が麻痺してしまう。ロベルトの甘く香ばしい浪漫性が、クララへの想いとしてくっきりと聴こえる。

第1曲目のハイネの詩を掲げると次のようであり、ロベルトの魂がウィンドー越しにみえてくる。彼のクララへの想いの絶頂がうかがわれる傑作である。

### 《詩人の恋：16曲》

#### 1. Im wunderschönen Monat Mai ~美しく麗しい五月に~

[https://www.youtube.com/watch?v=EZLjf\\_m6j0A](https://www.youtube.com/watch?v=EZLjf_m6j0A)

ドイツの春の訪れは五月。花のつぼみが芽吹くように、ぼくの心の中にも恋が芽生えたと歌う。恋の芽生えと同時に生じた主人公の不安、そしてその行く末を暗示しているかのようなシューマン独特の色彩豊かな手法である。

Im wunderschönen Monat Mai	美しく麗しい五月に
Als alle Knospen sprangen,	花のつぼみがみんな芽吹き始めると
Da ist meinem Herzen	ぼくの心の中にも
Die Liebe aufgegangen.	恋が咲き出てきたんだ

Im wunderschönen Monat Mai	美しく麗しい五月に
Als alle Vögel sangen,	鳥たちがみんな歌い始めると
Da hab' ich ihr gestanden	ぼくもあの人に打ち明けたんだ
Mein Sehnen und Verlangen.	ぼくの心のひそやかな想いを

対訳・楽曲解説/大和響 <<http://blog.hangame.co.jp/B0000689713/article/17459612/>>

《リーダークライス》はロベルトの最高傑作かつ代表的名作であろう。これは、ソプラノ歌手によるものが多く、とくに、20世紀のマイスタージンガーであるエリザベート・シュワルツコップには、酔いしれて夢に彷徨い、私の魂が根こそぎ持っていかれてしまう。彼女の解釈と歌いぶりには、毎度のことながら驚かされている。他とは芸格の差が明確に認められる。これこそ本物だ。つまり、ロベルトの豊潤かつ優美なロマンが、みごとに膨れあがって歌われている。この歌手は、リートが出来映えに比例して歌いぶりが高揚する。普通の歌手は、得意な歌に熱を上げる。だから、名歌手たる所以ともなろう。

フリードリヒとの法廷闘争が落ち着いた1940年5月に、クララと相談したのだろうか。この《リーダークライス》を、二人の結婚に理解ある助言をしてくれたクララの生母、バルギール夫人に贈った。

## 《リーダークライス：12曲》

### 1. In der Fremde 異郷にて

<https://www.youtube.com/watch?v=PJJVpdJDBBY>

Aus der Heimat hinter den Blitzen rot	赤い稲妻のかなたの故郷から
Da kommen die Wolken her,	雲がこちらにやってくる
Aber Vater und Mutter sind lange tot,	父母はすでに無く
Es kennt mich dort keiner mehr.	故郷で私を知る者はもういない
Wie bald, ach wie bald kommt die stille Zeit,	ああ 静かなる時の訪れは もうすぐだ
Da ruhe ich auch, und über mir	そのときは私も安らうのだ
Rauscht die schöne Waldeinsamkeit,	頭上で森の孤独が ざわざわと音をたてる
Und keiner kennt mich mehr hier.	ここでも 私を知る者はもういない

(ヨゼフ・フォン・アイヒェンドルフ、対訳:山根信明)

<[http://yamamasu.world.coocan.jp/lieder\\_text\\_schumann\\_op39-1.html](http://yamamasu.world.coocan.jp/lieder_text_schumann_op39-1.html)>

いずれにしても、前回のクラシック巡礼で聴いてきたシューベルト歌曲にくらべると、大人の情感の豊かさに愕きを隠せない。ウィーン少年合唱団のように、シューベルトは子供でも歌えるが、シューマンのリートはそうはいかない。

## ピアノ協奏曲 イ短調

1845年、35歳になったロベルトは、段々と始まった心身が衰弱する病氣療養のため、17年間もお世話になったライプツィヒを後にして、ドレスデンに一家そろって移った。この町は、磁器の生産でも昔から有名で、1708年、ヨハン・フリードリッヒ・ベトガーがヨーロッパで初めて磁器を発明して以来、ドレスデンは磁器の街としても栄えていた。

音楽文化はバッハの時代から高い水準にあることが知られており、伝統に支えられて演奏活動も盛んであった。しかしながら、ロベルトは作曲を少なくして塩泉療養に専念した。そこで、4年間も温めていたピアノ協奏曲の完成をみた。

### **ピアノ協奏曲イ短調 Op.54**

<https://www.youtube.com/watch?v=zsnPzcc1Zb0>

それまで、あれほど、ピアノ曲や歌曲を書きつづけたロベルトであったが、1838年には自ら「ピアノは私にとってあまりに窮屈になってきた」と語ったと伝え聞く。

第1楽章：短いオーケストラのトゥッティ（管弦楽全奏）の投げかけの後つづく、夢のような主題は、ダヴィッド同盟員キアリーナ（クララ）のスペルに基づいて書かれたという。

第2楽章：インテルメッツォ「間奏曲」という題にふさわしい短い楽章であるが、クララ作曲のソナタからのフレーズを採用しているらしい。この協奏曲は、最も、ロベルトの麗しい浪漫性に溢れている。ここだけで、この曲が飛び抜けていると言える。

第3楽章：打って変わって明るい色調になる。最後は華々しく分散オクターブで終わる。

この協奏曲は、おしどり夫婦を地で行くがごとく、クララの独奏とフェルディナンド・ヒラーの指揮でドレスデン管弦楽団により内輪内で、1845年12月に試演された。次の年の正月には、ライプツィヒ・ゲヴァントハウスにて大々的に、クララ独奏で公式的に初演され、称賛を浴びた。

ロベルト以前には、やはり、ベートヴェンのピアノ協奏曲が輝いていた。特に、第3番、第4番、第5番「皇帝」の3曲になるが、これらを凌駕するほどのものが現れるのは、ブラームスの作品を待つしかない。ただし、ショパンのピアノ協奏曲とは並ぶものとして聴ける。

## デュッセルドルフ

ロベルト一家は、1843年（33歳）、ロベルトの精神不安定のため、ライプツィヒからドレスデンへと転居する。が、町の精神科医の診断を受けて処方薬を呑むことになった。慢性的な精神病に耐えながら、ドレスデンで5年過ごした後、気分も落ち着いてしだいに音楽監督や指揮者のポストを囑望しはじめた。ライプツィヒ・ゲヴァントハウスやドレスデン宮廷管弦楽団の指揮者など食指を伸ばしたがうまくいかなかった。

そんな時に、友人のフェルディナンド・ヒラー（1811-1885）からデュッセルドルフ市の音楽監督に就かないかとの問合せが寄せられた。それまでヒラーがその職を務めていたが、隣のケルン市に移る話がまとまったので、招請したいということだった。1849年のことである。

一時は返事を保留したものの、この誘いを僥倖ととらえて、ロベルトは受けることにした。

### 現在のデュッセルドルフ



<https://www.compathy.net/magazine/2017/03/08/dusseldorf-sightseeing/>

1850年、40歳のロベルトは一家を連れて、ドイツ東部のドレスデンからドイツ西部へ、大河ラインのほとりの大きな商業都市デュッセルドルフに赴任した。この頃は、すでにライプツィヒやドレスデンに引けをとらないほどの文化・芸術の盛んな街になっていた。ロベルトは音楽監督として、オーケストラの指揮および合唱隊の指導など主に勤めながら、年4回の定期演奏会も運営した。

第1回コンサートは大成功だった。曲目は、ベートーヴェンの序曲、メンデルスゾーンのピアノ協奏曲ト短調などでクララのピアノも活躍した。

そういった忙しい公務の合間をぬって作曲にもいそしんだ結果、次の大作が産まれた。

**交響曲第3番「ライン」 作品97 (1850年)**

<https://www.youtube.com/watch?v=wmyc-CWmsOA>

第1楽章 生き生きと(Lebhaft)

第2楽章 スケルツォ きわめて中庸に(Sehr mäßig)

第3楽章 速くなく(Nicht schnell)

第4楽章 荘厳に(Feierlich)

第5楽章 フィナーレ 生き生きと(Lebhaft)

この「ライン」はシューマンが最後（4番目）に書いた交響曲であるが、出版順が3番目なので「第3番」となっている。交響曲第3番というとベートーヴェンの「英雄」が思い浮かぶが、シューマンはそれを意識して「ライン」の調性を同じ変ホ長調にしたそうだ。



ライン川とケルン大聖堂（デュッセルドルフの隣町）<<http://www.kawasaki-sym-hall.jp/blog/?p=10609>>

しかしながら、私は次の第4番の方に共鳴してしまう。なにしろ壮大である。

**交響曲第4番 二短調 作品120 (1841年)**

[https://www.youtube.com/watch?v=yunhjIVTG\\_U](https://www.youtube.com/watch?v=yunhjIVTG_U)

妻クララの22歳の誕生日1841年9月13日に、彼女に贈られたという。

右の記念写真は、デュッセルドルフに越した頃のものと思われる。ロベルトが療養所にいた頃に、第8子が産まれている。クララの子沢山の逞しさは、彼女のピアニストとしての絶え間ない演奏活動を併せて想像すると、ロベルトの妻としても、生きる精神のふくよかさに圧倒される。右の写真でも、中央のクララの自信に満ちた素顔にロベルトすら妬けてしまうのではないだろうか。

長女マリエと次女エリーゼは、母の躰しづけよろしく妹と弟たちの面倒をみたのであろう。でなければ、あれほどピアニストとしての活躍は成し得なかったはずであるから。



<http://www.geocities.jp/kim39570741/column/Column029.html>



<http://simplegreenlife.seesaa.net/article/292297407.html>

る。

ヨーロッパ共通通貨ユーロに統合されるまで、100ドイツマルク紙幣に、クララの肖像が使われていたことも、いかにクララがドイツ国民に愛されてきたか、如実にうかがえる。

次頁に掲げるように、絶えることのない凄まじい演奏活動の履歴にて明白である。EU統合はクララの活動に源を発しているのではないかとも思える。うらやましくな

## クララの演奏活動略歴

年	演奏活動	備考
1828(9歳)	10月 クララ、ゲヴァントハウスで演奏会	
1830(11歳)	3月から4月 ドレスデンに最初の演奏旅行 11月 ゲヴァントハウスで、初めてのソロコンサートを開催する	10月 ロベルト、ヴィーク家に住み込む。
1831(12歳)	9月 ワイマール、フランクフルトなどを経てパリに演奏旅行	
1832(13歳)	7月 ゲヴァントハウスで演奏、ヴィルティオーゾとして認められる。秋 ツヴィッカウでロベルト・シューマンの作品を演奏	
1833(14歳)	ライブツィヒ、シエムニッツ、カールスバッド、シュネーベルクで演奏。	
1834(15歳)	ドレスデンへ演奏旅行。 翌年4月 にかけてマゲデブルク、ヘルムシュテート、ブラウンシュヴァイク、ハノーヴァー、ブレーメン、ハンブルクに演奏旅行。	
1835(16歳)	夏 ツヴィッカウに演奏旅行。 11月 メンデルスゾーンの指揮により、ゲヴァントハウスにてクララのピアノ協奏曲第1番を演奏。 秋から翌年春 にかけてドレスデンなどに演奏旅行。	ロベルトと親交が深くなる。 10月 ショパンがヴィーク家を来訪。
1836(17歳)	2月から5月 ベルリン、ハンブルク、ドレスデン、ブレーメンなどに演奏旅行。	
1837(18歳)	2月から5月 ベルリン、ハンブルク、ドレスデン、ブレーメンなどに演奏旅行。 10月から翌年5月 にかけてプラハ、ウィーンなどに演奏旅行。	
1839(20歳)	2月から8月 ホフ、ニュールンベルク、アンスパッハ、シュトゥットガルト、カールスルーエ、パリなどへ、父親を伴わずに演奏旅行。	ライブツィヒ裁判所に、ヴィークに対して訴訟。
1840(21歳)	1月 結婚資金のため母親と共にシュテッテン、シュトゥットガルト、ハンブルク、ブレーメン、リュベックに演奏旅行。	8月 判決が下り勝訴 ライブツィヒ近郊のシェーネフェルトで結婚式
1841(22歳)	3月 ゲヴァントハウスで結婚後初めての演奏会。	9月長女マリーを出産
1842(23歳)	2月 マゲデブルク、ブレーメン、コペンハーゲンなどに演奏旅行。 7月 ボヘミア地方に演奏旅行。	秋 ロベルト発病
1843(24歳)		1月 ヴィークと和解。4月 二女エリーゼを出産。
1844(25歳)	1月から5月 ロシアへ演奏旅行。	ロベルトの病いが重くなる。 12月 ドレスデンに移る。
1845(26歳)	秋 ドレスデン、ライブツィヒで演奏活動。	3月 三女ユーリエを出産。
1846(27歳)	11月から翌年2月 長女マリー(5歳)、二女エリーゼ(3歳)、ロベルトと共にウィーンに演奏旅行。	2月 長男エミール出産
1847(28歳)	1月 ウィーンからプラハへ。2月 ドレスデンに戻るが、ロベルトの『楽園とペリ』上演のためベルリンに向かう。3月 ドレスデンに戻る。 7月 ツヴィッカウでシューマン音楽祭	6月 長男エミール(1歳)死亡

年	演奏活動	備考
1848(29歳)		1月 二男ルートヴィヒを出産。
1850(30歳)		7月 三男フェルディナンドを出産
1850(31歳)	3月ライブツィヒ、ハンブルク、ブレーメンへ演奏旅行。 11月デュッセルドルフでソロコンサートを開催。	ハンブルクでのクララのコンサートをブラームスが聴く。 9月 ロベルトがデュッセルドルフの音楽監督となり、デュッセルドルフに移り住む。
1851(32歳)		9月リストがシューマン家を来訪。 12月四女オイゲーニエを出産。
1852(33歳)	3月 ライプツィヒでのシューマン週間でリストらと共演	
1853(34歳)	5月 デュッセルドルフでのライン音楽祭で演奏。 11月 事実上指揮者を辞任したロベルトを伴いオランダに演奏旅行。	10月 ブラームス(20歳)が来訪。
1854(35歳)	1月 ハノーヴァーにロベルトと共に演奏旅行、ブラームスらと共演。 7月 ベルリン、8月 ベルギーへ演奏旅行。 10月から12月 にかけてベルギー、ハノーヴァー、ライブツィヒ、フランクフルト、ハンブルク、リュベック、ブレーメン、ベルリンに演奏旅行。	2月 ロベルト、ライン河に投身自殺を図り未遂に終わる。 3月 ロベルト、エンデニヒの精神病院に入り、ブラームスがクララを助け支える。(ブラームスは シューマン家の近くに下宿) 6月 四男で末子のフェリックスを出産。
1855(36歳)	1月 ネーデルラント地方、2月 ダンツィヒ、3月 ベルリン、ポメラニア、5月 デュッセルドルフで演奏。 秋からのシーズンにはウィーン、プラハへ演奏旅行。	8月 Poststr.に転居。ブラームス(22歳)も同じアパートの1部屋を借り、演奏旅行に出るクララの留守を守る。
1856(37歳)	1月から3月 ウィーン、ブタペスト、プラハへ演奏旅行 4月から7月 イギリスで26回の演奏会。 秋 ドイツ各地、デンマークに演奏旅行。	7月14日、23日の2回エンデニヒを訪れるが面会禁止。 27日 面会を許可されるが <b>29日にロベルト死亡(46歳)</b> 。 31日 ボンで葬儀、埋葬。
1857(38歳)	春 イギリス、スイスに演奏旅行。 ブラームスやヨアヒムとの研究も熱心に続ける。	9月 デュッセルドルフの住居からベルリンの母親の元に引っ越す。 リウマチの発作が起きて腕に痛みを覚える。
1858(39歳)	南ドイツ、スイス、オーストリア、ハンガリーなどへ演奏旅行。	
1859(40歳)	ドイツ各地、オランダ、イギリスなどに演奏旅行。この頃より春のシーズンにはロンドンに行くのが恒例となる。	
1860(41歳)	オランダ、オーストリアに演奏旅行	ツヴィッカウに生誕50年のロベルト碑。
1861(42歳)	北ドイツ、ベルギーに演奏旅行。	
1862(43歳)	スイス、フランス、ベルギーに演奏旅行。	10月 バーデン・バーデンに小さな家を買う。
1863(44歳)	1月からオランダ、フランス、ベルギーに演奏旅行。 秋 北ドイツに演奏旅行。	5月 子供たちを集め、バーデン・バーデンに住み始める。
1864(45歳)	年の始めに20年ぶりにロシアへ。 冬デュッセルドルフ、北ドイツに演奏旅行。	
1865(46歳)	1月から東ドイツ、ボヘミア地方、イギリスに演奏旅行。 秋はフランクフルトなどで演奏。	

年	演奏活動	備考
1866(47歳)	オーストリア、ハンガリーに演奏旅行。 デュッセルドルフ、バーデン・バーデン、フランクフルト、ライプツィヒ、ケルン、ボンなどで演奏会。	
1867(48歳)	ドイツ各地を経てイギリスへ演奏旅行。	
1868(49歳)	ベルギー、イギリス、オーストリア、ハンガリーに演奏旅行。	
1869(50歳)	オランダ、イギリス、オーストリアに演奏旅行。	9月 三女ユーリエ結婚してイタリアへ。
1870(51歳)	イギリスへ演奏旅行。	長男ルートヴィヒ、精神病院に入院(22歳)。三男フェルディナント、普仏戦争に召集される(21歳)。
1871(52歳)	オランダ、イギリスに演奏旅行。	9月 三男フェルディナント帰還したがリウマチに冒されていた。
1872(53歳)	イギリス、オーストリア、ハンガリーに演奏旅行。	3月 母親マリアヌス・バルギール、ベルリンで死亡。11月 三女ユーリエ、バーデン・バーデンで結核のため死亡(27歳)。
1873(54歳)	ベルギー、イギリスに演奏旅行。 8月 ボンでシューマン祭が盛大に行われる。	8月 三男フェルディナント結婚。 10月 父親ヴィーク死亡(88歳)。
1873(54歳)		11月 バーデン・バーデンからベルリンに移転。長女マリー、四女オイゲーニエと住む。
1874(55歳)		リウマチ悪化の為、活動が衰える。
1876(57歳)	オランダ、イギリスに演奏旅行。	
1877(58歳)	オランダ、イギリス、スイスに演奏旅行。 ブラームスと『シューマン全集』の編集を始める。	11月 二女エリーゼ結婚してアメリカへ。
1878(59歳)	9月 フランクフルト音楽院教授になる。 10月 フランクフルトとライプツィヒで演奏生活 50周年の祝賀会が催された。	フランクフルト・アム・マインに長女マリー、四女オイゲーニエ、末子フェリックスと住む。
1879(60歳)	ブラームスと『シューマン全集』をブライトコプ・ウント・ヘルテル社から出版。 スイスに演奏旅行。	2月 フェリックス結核のため死亡(24歳)。
1880(61歳)	スイス、イギリスに演奏旅行。	5月 ボンのシューマンの墓に記念碑が建てられる。
1881(62歳)	春「王立音楽アカデミー」のメンバーとなってロンドンから戻る。	二女エリーゼ、アメリカから家族とフランクフルトに越してくる。 12月 サン・サーンスがクララを来訪。
1882(63歳)	イギリスに演奏旅行。 ドイツ、スイス、イタリアに演奏旅行。	
1883(64歳)	オランダに演奏旅行。	
1884(65歳)	イギリスに演奏旅行。	聴覚が衰え始める。
1885(66歳)		『シューマンの若き日の手紙』を編集、発刊。
1886(67歳)	イギリスに演奏旅行。	
1887(68歳)	イギリスとスイスに演奏旅行。	三男フェルディナントのモルヒネ中毒がひどくなり、彼の6人の子供たちの面倒をクララが見る。
1888(69歳)	<b>イギリスに 19 回目の演奏旅行、これが最後となる。</b>	

年	演奏活動	備考
1889 (70 歳)		9 月 ウィルヘルム皇帝から「芸術への功績」に対して黄金のメダルを受ける。
1891 (72 歳)	3 月 最後の演奏会。 肺炎にかかる。	6 月 三男フェルディナンド、モルヒネ中毒による衰弱のため死亡 (42 歳)。
1892 (73 歳)	音楽院の教授を退くが、家で教え続ける。 聴覚が著しく衰える。	四女オイゲーニエ、イギリスで結婚し、ピアニストとしても成功する。
1895 (76 歳)		6 月 長女マリーと共にデュッセルドルフを訪問。 10 月 ブラームスの最後の訪問。
1896		3 月 軽い脳溢血の発作。 4 月 経過良好。 5 月 7 日 ブラームスに誕生日祝いの手紙を書くが、絶筆となる。 16 日 再び脳溢血の発作。 5 月 21 日 未明に死亡 (76 歳)。 遺骸はボンに運ばれ、シューマンと同じ墓に埋葬される。
1897		4 月 3 日 ブラームス死亡。63 歳。

「クララ・シューマン — 現地調査に見る活動の軌跡 — 川嶋 ひろ子」より

<[https://ci.nii.ac.jp/els/110006667526.pdf?id=ART0008693527&type=pdf&lang=en&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1464538498&cp=>](https://ci.nii.ac.jp/els/110006667526.pdf?id=ART0008693527&type=pdf&lang=en&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1464538498&cp=>)>

## ブラームス

人生とは、不可思議きわまりない。

デュッセルドルフで幸福な音楽家生活を、クララともども送っていたのに、いつのまにか二つの禍<sup>わざわい</sup>がロベルトにしるのび寄ってきた。うまくいったはずの音楽監督ロベルトに対して、批判者が出たのである。しかも、部下のような秘書官があれこれとロベルトの粗を拾い出した。目的はなく、彼の粘性の性分、いわば狐目をした横目のような者だったという。合唱団との関係もギクシャクして、そのレベルは一向に上がらなかった。

加えて、1852年(42歳)には、体調が悪くなり、リュウマチの発作に悩まされた。彼自身、しだいに不眠と鬱症状が出て動作も緩慢になってきた。秋には、はげしい眩暈<sup>めまい</sup>と聴覚に異常をきたし、音楽協会の理事会からの勧告もあり演奏会を一時、降りざるをえなくなった。

1853年、健康は小康状態ではあるが、回復して交響曲第4番作品97の演奏・指揮では、喝采を浴びて大成功だったが。

そんなところに、ヴァイオリンの名手ヨーゼフ・ヨアヒム(1831-1907)が訪れて、3ヶ月ほど滞在して、ロベルトはその演奏に瞠目し、にわかには生気を取り戻した。

しばらくして、そのヨアヒムの紹介状を携えて、リュックサックをしょって泥だらけのブーツを履いた青年：ヨハネス・ブラームス(20歳)が、ロベルトの門をたたいた。その彼が、ロベルトとクララの前で、自作品の歌曲とピアノ曲を披露し、夫妻は深い感銘を受けたようである。

ロベルトの感動は、次に掲げるように「音楽新報」に掲載された。この著述を読むと、ロベルトの炯眼<sup>けいがん</sup>にあらためて私たちは思い知らされるのではないだろうか。

\*\*\*\*\*「新しい道」<1853年10月28日付音楽新報>\*\*\*\*\*

何年もの歳月が過ぎた。——それはほとんど私がこの雑誌の編集に捧げた年月と同じほど、いわば10年ほどにもなる。この豊かな思い出のある領域で、かつては数々の発言を行ったのだったが。この十年、私は緊張した創作活動を行ってきたが、しばしば、新しい音楽の力を告げるような数多くの才能に刺激を受けることもあった。……

私は、最大の関心を傾けながら、こうした前駆のあとで、いつか突然、一人の人物が現れるだろう、現れるにちがいないと思っていた。時代の最高の表現を理想的に語るよう召命を受けた人、段階的にその力を拓いて巨匠であることを示すような人でなく、ちょうどクロニオン(ゼウス)の頭から完全武装して飛び出してきたミネルヴァのような人が。そして、彼は来た。そのゆり籠が優雅の女神と英雄に見守られていた若者が。

彼の名は、ヨハネス・ブラームスといい、ハンブルグの生まれである。……もし、彼がその魔法の杖を振り下ろし、合唱と管弦楽において大きな響きの力が彼に与えられるなら、精神の世界になお、驚くべき光景が現れるだろう。……

どんな時代にも新しい精神のひそかな同盟というものが存在する。そこに属する盟友たちは、芸術の真理をますます明るく照らすために、いたるところ喜びと祝福を広げつつ、いっそうその環をしっかりと結ぶがよい。

ロベルト・シューマン

“ゼウスの頭から完全武装して飛び出してきたミネルヴァ”とは、完全な存在が突然あらわれるときの比喩である。

この記事に対して、ブラームスは次のように謙虚に返礼をしたためた。

「尊敬する先生、貴方は私に限りない幸福をお与えくださいました。この感謝は到底言葉で申すことができません。貴方の愛とご好意がどれほど私を高め感動させたか、近いうちに私の作品が証明することが出来ますように、惜しみなくお与えくださった公の賛辞は、私の作品に対して聴衆を緊張させると思いますが、これに私が応えられるかどうかはわかりません。このことは出版する作品の選択を慎重にする必要を何よりも気づかせてくれました。三重奏曲は、発表せず、作品1と作品2には、ハ長調と嬰へ短調のソナタを、作品3には歌曲、作品4にスケルツォ変ホ短調を選ぶつもりです。先生のお名前をできる限り汚さぬよう、全力で精進していることをご覽いただけるでしょう。……」

\*\*\*\*\* 藤本一子著：作曲家◎人と人間シリーズ『シューマン』(音楽之友社)より \*\*\*\*\*

このロベルトの記事は、欧州の音楽界に大きな波紋を投げかけた。つまり、若干20歳の海のものとも山のものとも判らない北ドイツの若造が、一躍、勇名を馳せてしまった。それほど、ロベルトの『音楽新報』は、業界の主要メディアになってしまっていたのである。一方、ワーグナーの台頭も昇竜のごとき状況にあったから、「ブラームス対ワーグナー」という巷の議論も沸き始めた。これは、ブラームスにとってはプレッシャー以外に、やかましい世論に辟易したであろうことは、容易に想像できよう。

でも、思いがけない刺激に澆漑としたロベルトは、また創作にもどったが、市の音楽協会ともめて音楽監督職を投げうった。まもなく、夫妻はオランダやハノーヴァーに旅行して、最後の灯が明るくなるように、演奏会を開き、絶賛された。帰投したロベルトは、耳鳴りの激痛を訴えて病院で診察を受け、自宅療養で小康を得た。しかしながら、精神は益々不安定になり、1854年2月末(43歳)に、ライン河に投身した。その様子を目撃者もあって救助され、一命をとりとめたものの、ロベルトの狂乱状態が止まないため、エンデニヒの精神療養所に隔離されてしまった。

\*\*\*\*\*「クララ・シューマン —現地調査に見る活動の軌跡— 川嶋 ひろ子」より\*\*\*\*\*

1854年3月ロベルトがエンデニヒの精神病院に入院した後、6月に末子フェリックスの出産を終えると、次のとおり、クララは驚異的な演奏旅行を始める。

月日	滞在地	内容
7月	ベルリン	三女ユーリエを実母マリアンネ・バルギールに預ける
8月	ブリュッセル、オステンデ	数回の演奏会と休暇
10月16日	ハノーファー	宮廷での演奏会
19日	ライプツィヒ	ゲヴァントハウス演奏会
23日	ライプツィヒ	ゲヴァントハウス演奏会
27日	ワイマール	リスト指揮による演奏会
11月3日	フランクフルト・アム・マイン	演奏会
4日	フランクフルト・アム・マイン	演奏会
数日	デュッセルドルフ	子供達に会いに立ち寄る
13日	ハンブルク	フィルハーモニーとの3回の共演
15日	アルトナ	演奏会
16日	ハンブルク	演奏会
18日	リュベック	演奏会
21日	ブレーメン	演奏会
23日	ベルリン	演奏会
29日	ブレスラウ	演奏会
12月1日	ブレスラウ	演奏会
4日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
7日	フランクフルト・アン・デア・オーデル	演奏会
10日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
16日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
20日	ベルリン	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
21日	ライプツィヒ	ヨーゼフ・ヨアヒムとの演奏会
22日	デュッセルドルフ	クリスマスで帰宅

クララが1854年から翌年にかけて得た収入は、ロベルトがデュッセルドルフで得た収入の4年分以上に相当する。ロベルトの入院費、息子たちの寄宿舎費用(現在の金額にして、一人につき1ヶ月約20万円必要)、家庭教師、家政婦など、後には孫の養育費もクララの肩にかかっていた。これらの費用を作るために驚異的な演奏会スケジュールをこなしていたことは十分に考えられるが、クララ自身友人に「音楽に没頭し、忙しく仕事をしている時、悲しみや苦しみをしばし忘れることが出来る。」と述べている。

生きるための活動と、世界的ピアニストとしての活動と、悲しみを忘れるための活動、これら全てがクララを動かしていたのではないだろうか。1854年以降、クララの活動はますます激しくなる。

\*\*\*\*\*「クララ・シューマン —現地調査に見る活動の軌跡— 川嶋 ひろ子」より\*\*\*\*\*

1856年7月29日、46歳のロベルトは静かに息を引きとった。それまでの間、クララはロベルトを興奮させるとして療養所の医師から面会謝絶され、ようやく、危篤の知らせがあつてから、クララは2年半ぶりに虫の息の夫に会えた。たった2年余りの子弟だったブラームス(23歳)もクララに随伴したという。

ロベルトの病気について、人は下司の勘ぐりのごとく、若い時に感染した梅毒のせいだと言うが、私は少し違うと考えている。すなわち、梅毒だとすると、生まれてくる男の子は、幼少から精神薄弱児になり、発育不良で尋常に育たないという話がある。母親の胎内で二次感染するからであるが、この夫妻の男児はいずれも、そんな徴候はない。したがって、ロベルトの持病的精神病は他の要因によるものではないだろうか。蛇足となろうが、ロベルトの姉エミーリエは、1826年に神経を病んで投身自殺したという事件もあった。また、ロベルトの次男ルートヴィヒは、22歳で精神病院に入院した。

とにかく、人々はどうしても暗い話に尾ひれを付けたがる。人間の弱く悲しい<sup>さが</sup>性でもある。すくなくとも、ロベルトとクララの微笑ましくも確固とした歩みを、この巡礼でたどってきたから、私は、そういった勘繰りを払拭している。

## エピローグ

冒頭に述べたように、私は、余りシューマンには傾注してこなかった。このクラシック巡礼を書き始めてから、自分の想いが溢れているブラームスに胸はときめいて、どの辺りでブラームスを採り上げるかワクワクと考え出した。

しかしながら、彼の師匠のシューマンを飛び越してはまずいと想い、とにかく、シューマンの人柄を掴むためには、クララ・ヴィークが欠かせないと結論した。そして、今年になって、原田光子の名著「クララ・シューマン：真実なる女性」を読破した結果、あざやかなシューマン像が出来上がり、私の曇天だった思考が紺碧に晴れ上がって、眺望が開けてしまった。出来るかどうか判らない「クラシック巡礼」を始めて、回を追うごとに私は悔んだが、こうして視野が開けてきた喜びは<sup>たと</sup>えようもない。

シューマンという人は好男子ゆえに女性にもてたが、ピアニストの美少女クララに魅了されてからは、一途に彼女を愛した。音楽は、なんとなく副産物と思えてしょうがない。たとえば、シューマン・リートの白眉である『詩人の恋』を聴けば、彼の音楽は彼女のためにあったことが明白となろう。ベートーヴェンは数多くの悲恋に泣いた。それに比べたら、シューマンの恋は成就したのだから、<sup>とてつ</sup>途轍もなく幸せ者だったことは、正直、否めない。この恋をシューマン亡き<sup>あと</sup>後、引き継いだのが、永遠の独身男：ブラームスであることは、クララの76年の生涯を辿ると判ってくる。ただただ、彼女を不滅の恋人にしてしまった。

これから、ブラームスに酔い<sup>し</sup>痴れながら巡礼していくが、ブラームスのかなわぬ恋も、人間界の男たちの一つの宿命なのかもしれない。

<参考図書等>

No.	題名	著者	発行元
1			
2			
3			
4			
5			
6			